

友に「元気で暮らせよ」「また再会を」と固い握手を互いに交わし、帰郷先ごとにバスに分乗して東舞鶴駅に向かつて出発した。

シベリア抑留記(二)

岡山県 片山 衛 真

六、十一中隊

十一中隊は土木建設の作業中隊だった。病室を出た私は次の日から作業に行く。十月中旬、毎日零下三十度、八度の寒さでの屋外作業は労働より寒さとの戦いでもある。レンガ造りの工場建設中だった。連日レンガを積む作業が行われていた。鉄板を焼きその上でセメントを練るのである。温めて作られたモルタルはレンガ積みで使用されると同時に凍ってしまう。レンガは凍って積まれて行く。支柱の中にはセメントを入れることになっていたが、雪と水を入れて凍らせた。暖かくなれば日本兵は日本に帰る。日本に帰れば建物が

倒れようと我々の知るところではない。ソ連責任者に知られないように手抜き工事で作業は進められた。

ソ連責任者は技術大尉だった。四中隊の工場長は鬼のように兵を酷使してきたけれど、十一中隊の作業責任者は我々に命令的に作業を強要しなかった。中隊長も兵に対して決して無理を言わなかった。そのためにも作業で苦しむようなことはない。また零下四十度を越す寒さになると屋外作業は休み、体力を温存することができた。作業ノルマは二〇パーセント、収容所で必要な費用も得ることができず、他の中隊に助けてもらう生活だ。給食も最下位の丁食である。四中隊は、ノルマは一〇〇パーセント達成され甲食を食べることはできるが、労働に酷使され死亡者は多かった。十一中隊は丁食で水の多い粥であるが、体を休めることで死亡者は少ない。作業工程も不明朗であり、六十人の隊員は寒さに耐える一日を過ごす始末でした。掘方は一立米掘れば一〇〇パーセントと定められている。けれどシベリアの寒さは格別だ。土が凍りツルハシを受け付けない。土を掘るには、掘る場所の上で木切れを集

め約二時間くらい燃やす。溶けた土を除きまた火を燃やす、それを一日幾度か繰り返す。一回に掘ることのできる量はバケツ一杯ほどだ。一日火を燃やしてもわずかしか掘れない。掘方の兵は数十パーセントのノルマ成果である。働かざる者は食うべからずという鉄則がソ連にはある。土木作業員は死ねというノルマの作業である。

三本木徳夫

十一中隊に来て私の右側に床を共にした三本木徳夫は、広島出身で原隊は別であるが同年兵であり、土木作業を知らない私によく教えてくれ、苦しい生活の中で他人の世話をよくしていた青年だった。五月二十七日のことでした。

日本帝国海軍記念日の日、忘れることのできない事件が起きた。朝、作業出動のため広場に集まったとき、三本木は私に作業を交代してくれという。彼は風邪を引いたのか熱があるようだ。体の調子が悪くても休むことのできない捕虜である。私はでき上がった工場の掃除、三本木は電柱の穴掘りだった。快く交代す

ることにした私は穴掘りに、彼は掃除をすることになる。今日はエニセイ河の流水が始まった日でもあった。流水を知らず町のサイレンが鳴った。エニセイ河の岸を毎日歩いて作業に行く。いつも静かな大河が流水で荒れている。大きな水が重なり合って流れて行く。地を鳴らしての流水、自然の恐ろしさを感ずる。空は晴れているが時折突風が吹いていた。

午前十時、十一中隊が建設した工場の建物が突風のために倒れてしまった。私は百メートルほど離れたところで電柱の穴掘りをしていたが、「三本木が」と倒壊した現場に走った。三本木はレンガ塀と鉄輪の間にいた。目の上から頭が割れ即死している。目は開き無残な姿になってしまった。二時間ほど前に私と交代した三本木、私が行くところだったと思うとかわいそうで仕方がない。三本木は生前、広島に父親が待っている一人息子であると話していた。私は三人兄弟だ。一人息子を失った父親の悲しみは、また彼は小さな茶色になった写真を大事に持っていた。可愛い看護婦さんだった。日本に帰ったら結婚するのだと帰国の日を待

ち詫びていた。帰国の日を楽しみに二度の寒い冬を耐え、帰国列車も走り出した、そんな声を聞く頃に帰国の夢は破れてしまった。三本木となぜ交代したのだ。指示された作業を交代したのも私は初めてだった。

死体は遠くない街角のレンガ造りの死体置き場に運ぶ。今まで死亡者は西の丘の上に捨てたが、ソ連の死体置き場は初めてだった。男女の区別なく重なり合って積まれている。死亡者は老人は少なく四十歳前後の人が多い。髪は入り乱れ、汚れた服、汚れた顔、これに勝る地獄はなからう。その中に三本木を運ぶ。私が行くところへ三本木が……。一本の花も供えることができず泣けて仕方がなかった。

マルクス思想では人間の死は動植物の死と同じで、人間の死後は何も残らない、土になっていくのだと。宗教は禁止され、教会、仏寺、墓地も見られない。死者に対しての取扱いは冷酷だ。五月下旬、倉庫の中は寒い。死体は凍っている、悪臭はない。凍った死体が溶ける頃には、ソ連の手で人里離れた人の訪ねることのできないところへ捨てられるのだらう。三本木の行

く先は誰一人知る者もない。倒壊した作業現場に帰ると、倒れた工場に向かい中隊は横一列になって現場を見ていた。今までに見たことのない高官数人が現場検証をしていた。支柱の中は雪と氷で固めたものだ。

暖かくなって溶けてしまった。その上突風。工作機械を取り付けていたソ連人が死傷した。死傷者の数は明らかではないが、私の見たところでは四、五人だと思う。手抜き工事、国家に損害をなした罪、十一中隊の兵は処罰を受け帰国は当分できないとみんな心配して検証を見つめている。中隊は作業中止で収容所に帰ることになる。夕刻、倒壊原因は突風のためと、手抜き工事は不問に終わった。私の思ったことであるが、手抜き工事を公表し我々を処罰すれば、彼ら高官達も責任を問われ処罰されるから手抜き工事を不問にしたのだと。人のよい、労働に無理を言わなかったソ連責任者は処罰を受け、その日から姿は見られなくなった。

私は帰国後、三本木の死亡を家族に知らせた。死を報告することは悲しいことであるが、生きて帰った者の責任と、三本木の話した広島へ行く。横川駅よ

り三本木行きのバスに乗り、三本木で降りると近くである。私が聞いた道順で思ったより早く実家に着くことができた。父一人が僅かな農作業で生活されていた。一人息子を失った父は、その悲しみでか、あまり丈夫でないようだ。先に帰った広島の人が病死と報告されていた。私も父親を悲しませまいと三本木の世話になったことを話す。けれど父親は私を見て、これが息子であったら、息子が帰ってくれたらと、病死の報告は父親を悲しませようだ。近くに三本木の墓があると聞き一人で行く。私は手を合わせいつまでも泣いていた。ともに助け合い励まし合った友、友の最期を思うと、なぜ交代したのだ、三本木の墓地はあれど彼の骨は遠いシベリアの地、それも誰も知らない場所に寒い寒い雪の下で眠っている、訪ねることもできないところに。夕日が西の空に沈んでいる。あの夕日が沈むところに三本木が……。沈む太陽に手を合わせる。三本木の父親を悲しませてしまった。でも友として死亡を知らせることも大事だ。もし報告しなかったら一生悔いを残すことになる。訪ねてよかったと思う。

同年兵中本

同年兵中本は奈良県出身、原隊は異なり十一中隊で知る。彼と二人で穴掘りを指示される。その穴が何に使用されるのか目的も知らされず、木切れを集め例のごとく土を暖め溶かしての作業、寒いときに火の燃えるところで土の溶けるのを待つ、これほど楽な作業はない。交代で火の番と木切れを集めるのが仕事である。穴を掘り始めて三日目、腰ほどの深さになったとき、私が木切れを集めて帰ったら油を積んだ馬車の車輪が掘った穴に落ちた。油が燃え、火柱が上がる。中本は火ダルマになって穴から飛び出してきた。私は中本の防寒帽、防寒服を除く。頭毛は残ったが顔は焼け皮は破れ、見られないほど変わってしまった。防寒具で頭と体には異常はなかった。医師の手当もなく薬もない。工場で機械油を頂いて顔に塗る。中本は痛みに苦しそうだ。彼は作業を休むこともできず連日作業に出ていた。私が火の番をしていたら私の顔が、と思うと人の運命が、宿命が……。中本君が可哀そうだった。私より一年は早く帰ったが一度も音信はない。

こんな人もいた。作業が終わり収容所に帰る頃、高

いところから落ちて足を骨折し歩行できない兵がいた。十一中隊で出会った兵である。召集兵なのか、四十歳近い老兵だった。戸板に乗せて兵舎に帰る。診断も手当もできない捕虜、不自由な彼をみんなでもよく世話をする。食事、便所も助けていた。ある兵が松葉杖を作って手助けをする。廊下をコトコトと松葉杖の音がする。日本人とは他人の苦しみをわが事のように協力していた。ソ連では見られないことだ。

収容所では帰国第一陣が出発することになった。第一陣は病弱者が帰ることになった。骨折した彼も帰国する一人である。出発する朝、今まで松葉杖で歩いていたのに帰国の喜びに兵舎を走り回っている。彼の不自由な身を案じ多くの人々が善意で助けてきた。ありがとうの言葉もなく、兵達は余りの変身に呆然としていた。高いところから落下、その時を見た者はいなかった。日本へ帰るために計画された骨折だった。自分の幸せのために他人の善意を裏切って行った。決して幸せな人生を送ることはできない。私は不幸な人だ

と思う。

特殊な作業

十一中隊は、私達六人を残し日本に帰って行った。残った六人は北海道、静岡、岐阜、山口、熊本、そして私。六人の作業はソ連人の責任者の指示により行動する。六人のグループは責任者の指示を忠実に守り働いた。私達の作業はノルマを要求されない。ソ連ではいかなる労働にもノルマがあり、ノルマによって給金も支払われる。ノルマ達成のために命を失うほど過酷な作業、そのノルマがない初めて知るソ連社会、それは役人達に利用される仕事である。ソ連では日用品が計画生産できないので、役人達が生活に必要な刃物、パケツ等、何でも作れる物を六人の者が作る。また役人達が必要とする工具を盗むことも要求される。私達に要求する役人本人は一人も顔を見せない。

ソ連共産主義社会ではあらゆる資源は国の所有するもので、個人で使用することはできない。また個人で人を使用することもできない。私達は品物を作る材料を盗んでこなくてはならない。盗った人を指示する役人

達は私達六人の者に毎日一五〇パーセントノルマ達成と表示してくれ、捕虜では最高額である四十五ルーブルが毎月支給された。ソ連では国民全員が計画した労働で生産されると信じていたのに、計画生産ではない。役人達はそれを利用して生活用品を作らせ給料を支払う。思想教育で受けた社会とは別の社会である。

二十三年三月ごろだった。エニセイ河の近くにある工場、その二階に取り付けてあるチェーンブロックを盗むように指示される。二人の兵が二階の窓から投下、私が現物を肩に私達の小屋に走った。残った兵は安全のために監視している。そして安全を知らせられる。

私は無事小屋に帰ることができたと思ったとき、後を追ってきたロシア人に現行犯で捕まった。ソ連責任者は知らん顔をしていた。グループの兵も心配そうに見守るだけ。私は連行された。レンガで作られた小さな小屋に入れられる。外からカチンと錠の音がする。ソ連では国の所有するものを盗めば重罪だ。長い間寒いシベリアで過ごしてきた、遠いシベリアに来て盗人になり投獄される。どうにでもなれ、もうどうすること

もできない。小屋の中央に座り故郷を思っていた。

明かり窓を見つめていると窓の錠が内側にある。窓も逃走できる位置にある。罪人が逃亡すれば罪は重くなる。日本に帰ることはできないかもしれない。ソ連人はばかな奴だ、逃げ道が作ってある。私は小屋を退出し他中隊に逃げ込んだ。私が逃亡したことをグループに知らせると、小屋に近づくな、捜していると言ってきた。十日間ほど他の中隊に混じって行動し、小屋に帰り、帰国の日まで盗っ人を続ける。不思議なことに十日間仕事もせずに逃げ回った私が、毎日一五〇パーセントの作業を達成したことになっていた。

七、帰国

クラスノヤルスクを離れる

九月十日、突然、明日帰国のため出発すると指示がある。ソ連の冬は早くやってくる。雪も降り始めてきた。今年の冬もシベリアで、そんな寂しい悲しい日々を過ごすとき「日本に帰る」と。あれほど日本に帰る日を夢にまで見ていたのに、最後に残った百五十人ほどの兵に喜ぶ姿は見られない。同年兵達で私の知る人

はみんな先に帰っている。最後に残った兵は収容所では九回目の出発になる。私達が帰ると日本兵捕虜は収容所には一人もいなくなってしまう。共産主義思想に、またソ連労働者達や役人達に多少感化されたのか、兵達の間関係は失われていた。互いに話し合うこともなく、残念だが最後に残った兵の出身地は一人も聞いていないし、私も出身地を教えていない。先に帰った兵士達は帰国を喜び合っていたのに。私も数人のソ連の人と作業したが、作業から帰って明日出発では彼らと別れの言葉も交わさず町を離れて行かねばならない。また、亡くなった友を残し日本に帰る、割り切れない気がする。体の具合もすっかりしない。私には今日の日が来るのが長過ぎた。遅過ぎた。幾度も帰国という話にだまされた。帰国という指示も「またか」信じられない。ソ連役人達は平気で嘘を言う。帰国船に乗るまでは「帰国」という指示も信用できない。書いた物は所持して帰国できない。違反すれば帰国できないという。新聞、メモ等書いた物は一切だめだと。そして友の遺骨遺品の所持も禁止された。所持

品らしきものもなく、帰国と言っても準備する必要もなかった。ちょうど三年前、小雪の降る道を死の行軍と苦しみに耐えてきた道だ。今日帰る日も小雪が降っていた。日本に帰る喜び、あの寒い冬を逃れるように歩く足は軽かった。

下車した引込線にダモイ行き列車が待っていた。他の収容所から集まった兵士達が乗車していた。帰国後知ったのであるが、クラスノヤルスクには日本兵捕虜二万人が強制労働に送られてきた。この町に十カ所くらいは収容所があったことを知る。いかにソ連は秘密主義であるか、情報は何も知ることのできない社会だった。出発前には日は暮れ、ホームの明かりに小雪が照らされ一層寂しい帰国でもあった。見送る者はホームに一人のソ連士官が立っていただけである。列車は東に走り出した。日本が近くなっていく。この日が来るのを夢に見ていた三村、三本木、納塚等の多くの死亡者を残して去って行く私は、数々の面影を追っていた。私だけでなく、同乗の兵士達はそれぞれの思いに走っているようだった。誰も話す兵は一人もいな

だ。そして友の遺骨遺品の所持も禁止された。所持

い。口を閉じた集団である。途中ハバロフスク駅近くで材木運搬をする日本兵十人ほどに出会った。彼らは今年の冬もシベリアで、と思うと気の毒に思う。十二日間列車は走り、港ナホトカに到着した。海の見える港、海の間には日本か。兵舎に入り、五十人ぐらゐに分かれて休むことになる。

ナホトカ

わずかな粟の粥が支給される。海の見える港に着いても誰も口を開こうとしない。そんなとき一人の兵が流行歌を歌った。懐かしい歌を兵士達は聞いていた。突然アクチーブの若者が大声で叫ぶ。「歌をやめろ、貴様らは何を考えている。今、日本共産党は資本主義者達に弾圧を受け苦戦しているとき、そんなときに流行歌とは何たることだ。貴様達は再教育が必要である」ボロの作業服が支給された。一人が流行歌を歌ったために明日より作業である。帰国の夢は吹っ飛んでしまった。ソ連では口を閉ざすことが身を守る条件であることを心しておかねば。

アクチーブ、ソ連情報部の教育を受けた日本兵のK

GBの存在だ。反動分子を監視するためにいつ現れるか知れない。彼らには「帰国を許さぬ」という目に見えない強力な武器がある。反論すれば帰国できない。絶対服従だ。共産主義社会に共鳴し、日本共産党勝利のために戦う戦士として帰国していく、これが帰国の条件である。

スコップを肩に海岸の砂浜を歩調を合わせて歩きながら、天に向かって大声で労働歌を歌い作業現場に向かう。作業現場は帰国船が目の前に見える砂浜である。穴掘りを指示される。乗船する兵を見て作業をする。これほど残酷な行為はないと思う。次の日は昨日掘った穴を埋めるのである。次の日はまた掘る、同じことを繰り返す。作業目的のない無駄な労力である。こんな労働は精神的に参ってしまう。こんなことはソ連役人達の指示なのか、アクチーブの者達の考えなのか、ソ連の罰なのか、全く人を馬鹿にした行為である。

無駄な作業が約十日間続けられ夕食後、明日乗船という指示。乗船前に所持品検査が行われた。メモ等書

いた物は絶対所持できない、もし不法所持が発見されたら帰国停止という。小さな紙に戦友、知人の住所、氏名を書いたメモを大事に持っていたが、帰国できぬと言われ、仕方なく提出してしまふ。若い日本兵のアクチーブがKGBの手先のごとく所持品検査をする。

憎き日本人である。無事検査を通過、昨日まで作業に通っていた海岸を、乗船のため足も地に着かぬ思いで急いでいた。

帰国船は高砂丸だ。甲板に日本から来た二人の白衣姿の看護婦さんが高く手を伸ばし、白いハンカチを左右に振っている。その姿を見たとき泣き虫の私の目に涙が出た。帰りを迎えてくれる、こんな姿は長い間忘れていた。日本人には温かい心の血が流れている、心の中でありがとうと叫んでいた。乗船入口に一人のソ連士官、二人のアクチーブの兵が乗船者を監視している。私の数人前の兵が数段タラップを上ったところで引き下ろされた。下ろす者も下ろされる者も口を閉じている。下ろされた理由は私には分からない。帰国船のタラップを数段上がったところで引き下ろす、これ

ほど人の心を傷つける行為はないだろう。下ろされた兵は海岸に立ち、帰って行く兵士達を悲しそうに見つめていた。下ろされた理由は分からないが、所持品が少し多いように思われた。私は無事乗船することができた。

復員船

乗船したのは真つ赤な太陽が沈む頃だった。岸壁にはソ連軍士官一人が立った。見送る様子でもなく復員船出発の確認のために立っているように思われる。鉄のカーテン、自由のない国から解放された。乗船、ソ連を離れる。兵士達は活気づいて自由に話している。

談笑もしている。夕食に折詰めが支給された。ご飯だ。米は三年の間に小さな握り飯一個。たくわん、梅干しもある。水の多い粟かコウリヤンの粥で過ごしてきた私達。復員船での折詰めのご飯は日本の味、日本はありがたい国であると思う。

夕食後、アクチーブの一人が大声で叫ぶ。「我々は団結して日本に上陸し、共産党の一員として民衆のために戦おう」乗船するまでは共鳴していた。けれど今

は自由である。日本兵でありながら日本兵を苦しめた
アクチーブの連中に反感をあらわにする。口論が始ま
る。赤旗組と日の丸組とに別れ、日の丸組は古年兵が
多く、赤旗組には日本軍国主義の苦しみを受けた若い
兵が多かった。前に帰った赤旗組のリーダーは海に捨
てられた、そんな話も聞いている。大事に至らず口論
は終わった。

上道町南方出身の古年兵が同県人として訪ねてくれ
た。帰国途中、出身地を話し合ったのは彼一人であ
り、筆記具、メモ等の用紙もないためか誰も話そうと
しなかった。そんなとき、誰に聞いたのか突然訪ねて
くれてありがたく思う。岡山に帰って今度は私が自転
車で彼の実家を訪ねて行った。彼は農作業を手伝って
いた。どうしたことが彼の父親は、息子を訪ねた私に
息子を会わせなくてこんなことを言った。「帰って来
ない者が帰っては迷惑だ。理由は売る米が少なくなる
し、戦時死亡年金がもらえなくなる」早く日本に帰っ
ていたらこんなことはないのに、待っていた父親の息
子に対する愛情が憎しみに変わったのか。故郷を一日

も忘れずシベリアでの過酷な生活に耐えて帰ってきた
のに。その日は彼と話す言葉もなく別れ、あれから五
十年近くになる。戦争、戦争が終わって捕虜から解放
されても喜ぶ日は遠く、畑で私を見送る彼の寂しい姿
が今も思い出される。

復員船のエンジンは快調に横になっている畳に響い
て来る。青い新しい畳だった。そっと畳に手を触れ幼
い頃を思い出す。母が針仕事をしている、周りで弟達
が遊んでいる、楽しい日々だった。長い間板の上での
生活だった。畳での生活は平和な日々が送れる、畳の
上にいることがこんなにすばらしいと思ったことは初
めてだった。

早朝一人甲板に出ると、真っ赤な太陽が水平線に昇
り始めていた。空はよく晴れているが、日本海の波は
高い。波を突き進む高砂丸。日本が近くなっている。
あれほどこの日を待ちわびていたのに喜ぶことはでき
ない。打ち寄せる波を見て思い出した。二度と生きて
帰らないと誓って故郷を離れ海を渡った私が、捕虜と
いう汚名を身に受け生きて帰っている。戦後の情報は

何も無い。内地の人々の苦勞も我々以上のものを味

わっているだろう。戦争で多くの友がこの船に乗ることができなかつた。戦争、戦争さえなかつたら。互いに励まし合つた帰らぬ友を思い出し涙が流れて来る。

私だけが日本に帰ってよいのだろうか、帰らざる者が帰って行く。早く帰っていいれば帰国の喜びも味わうことができたのに。体の具合もよいとは言えない、三年の生活が私には十年もの長い年月に思える。一日が過ぎるのが長い時間だつた。片時も忘れることのできなかつた日本、日本に帰る日を前にして、日本に帰つてよいのであろうか、寂しい気持ちをもつることもできない。寒くなつたので船内に戻り休む。

昼頃、「日本が見えるぞ」その声で私は甲板に出た。日本の連山が見える。美しい日本の姿だ。皆この日をどれほど待っていたか、母の国、日本を。遠くに見えていた連山が見る見る大きくなってくる。人間関係の失われた集団、話し合う者、喜び合う者は誰一人としていない。この日が余りにも遅過ぎた。

舞鶴港

高砂丸は静かな舞鶴港に入港して行く。港には数隻の日本海軍の軍艦がマストを残して沈んでいた。漁船が白い波を残して走って行く。岸壁に接岸できない高砂丸は沖合に停船、ハシケに分乗して上陸していく。岸壁には大勢の出迎えの人、日の丸の小旗を持って、「ご苦勞様、お帰りなさい」布に大書されていた。体の調子が悪いのか、何を見ても感動しない、ただ呆然と見つめているのみである。迎えのハシケが待ちきれず一人の兵が海に飛び込み泳いでいく。

上陸して復員宿舍まで二百メートルほどの道の左右に迎えの人の波、父が妻が子供が、抱き合つて喜び合っている。泣いている者もいる。人生で最高の日でもあつたらう。私には迎えの人は来ないと予感していた。幾度も死を逃れ、帰らぬ人が帰つてきた。歩く足も重い。戦後の情報は知ることができない。敗戦の日本は大変だろう。興安嶺で、シベリアで東の空を見ては泣いていた私が、なぜ日本に帰つたきたのに喜ぶことができないのだろうか。共産主義社会での精神的苦

痛を受けたためか、シベリアボケになっているのか。

舞鶴では風呂に入ることができた。長い間風呂に入ることができなかった。私は風呂が好きだった。

ハイラルで初年兵教育を受けていた当時、訓練が終わり、「入浴」の号令で一番に浴場に走って行った。浴場の戸を開け「片山一等兵、入浴お世話になります」。一歩中に入ると古年兵が一人いる。古年兵に「入浴お世話になります」。返事はこうだ。「貴様にはお世話ならん」。仕方なく「お世話になりました。回れ右」、風呂に入らず中隊に戻る。大事なことだ、風呂に行った顔をせねばならぬ。洗面所で手と顔を洗い夕食を待つ。食前になったら風呂に入らなかつた理由で暴力を受け、断食させられたことがある。ハイラル三カ月間で一度の入浴がこの始末だった。軍隊では初年兵には古年兵が神様のような存在だった。舞鶴の温かいお湯に入っていると過ぎ去った思い出が今は楽しい思い出でもある。舞鶴に帰っても出身地、氏名を話し合う友に恵まれず、話そうとも聞こうともしない。不思議なほど人間関係は失われていた。

舞鶴駅

関西以西の人は復員列車で舞鶴駅を出発、ホームには舞鶴の婦人会、女学生の人々が白いエプロン姿でお茶を接待していた。忙しそうに「ご苦勞様、お茶をどうぞ」と走り回っていた。温かいお茶を頂いた、おいしいお茶だった。私は故郷に帰ってよいのだろうか、捕虜という汚名を身に、そして帰らぬ友を残してきた。心の傷も深い。舞鶴のお帰りなさい、ご苦勞様、温かいお茶。日本は戦争に負けた、けれども日本人々の心は失われてはいない。幸せを願い走り回っている姿を見て、日本に帰ってきてよかったと舞鶴の人々に勇気づけられました。ありがとうと言う私に笑顔で去って行った婦人、五十年近くたった今も忘れることはできない。本当にありがとうございました。

舞鶴を離れた列車は走る。山野を谷を川を、夢にまで見た美しい日本の景色。栗が柿が実っている。キツネ花が真っ赤に咲いている。稲刈りをしていた人々が手を休め私達に頭を下げている、戦後私達以上に苦しい年月を過ごした人々なのに。ソ連で見ることででき

ない光景だ。京都や大阪で下りて行く兵士、別れの言葉もなく暗いホームを去って行く。次の駅は岡山、岡山で下車したとき私の戦争は終わるのだ。

八、私の見たソ連

十五共和国、百を超す多民族ソ連が分解、共産主義社会から民主主義国家として変わっていく。その過程において私達には不可解なことが多く、鉄の扉が解放された現在でもソ連を知ることができない。それは過去の共産主義思想が根強く指導されていたのと、ロシアの地方地区は住むところによって生活様式も多少異なっていたと思う。私の知っているのはクラスノヤルスクの町で、この町は寒さのために草も生えない。草がなければ動物も生きることができない。人間の住むところではない。昔から流刑者の町として知られたところで、食糧、燃料等は他の地区から搬入せねば生活できない町である。この町に来た私達は寒さ、食糧不足、強制労働でノルマに苦しめられ、ただ日本に帰る日を、その夢だけを追い続けた。超秘密主義ソ連のこと、生活で情報を知ることができなかった。帰国一

年前はノルマを強制されない社会主義に反した作業に従事したために、ソ連の実情を少しは知ることができた。

死者に対して

思想教育では、人間の死について進化論、唯物論を教材とし、人間の死は動植物と同じであるとす。人間の死は人間の終わりでも何も残らない。土と化するのみである。そのために寺院、教会、墓地もこの町には見られない。

二十年の冬は多くの兵が死亡した。死亡した兵をソリに乗せて西の丘に捨てて行く。下着は残る兵が必要のために裸体で捨てる。体力のない私はソリを引くのに苦しい。ソ連兵は無情に早く早くと呼ぶ。今日引くソリに明日は私が、そんな気がして仕方がなかった。ソリに乗せた兵の氏名も出身地も知らないし、知ろうともしない。それは自分の命が今日か明日か知れぬとき、知る必要のないことである。零下三十幾度の毎日、死体は凍り、雪の上に捨てて。土は凍り掘ることできず、そのまま放置してしまふ。生きて帰った私

は、ただ戦後四十幾年過ぎても思い出して夜眠れぬ日が多かった。四十七年目に再会した愛媛県川之江出身の矢野さんの話で、数人の兵を連れて死体を埋めに行つたことを話してくれた。雪の上に捨てて掘つたことを知らなかった私は、ほっとした。これが私の実感でした。矢野さんも、五十年近くなっても過去として忘れることができず眠れない日々が続いたという。

四十八年目に再会した田中九市同年兵の話によると、土が溶けて暖かくなつた頃使役で死体を埋めに行つたと、当時の話をした。ソ連兵は死体を深く掘ることを要求したが、栄養失調で土を掘る体力がなく浅く掘つたという。彼も現在においてもシベリアの苦難の日々を夢に見るといふ。矢野さんは今平和な日本で人生を過ごすことができるけど、帰らぬ友を思うと心が痛み夜眠れない日が続いた。戦争だけは二度としてはならぬと思う。私達の願ひは届かぬこととは思つても、互いに助け合い励まし合つて帰ることのできなかつた兵をクラスノヤルスクに訪ね、一輪の花を捧げ、一握りのシベリアの土を日本にある墓地に埋める

ことだ。埋めた場所も矢野さん、田中さんがいなくなれば永遠に世から忘れ去られてしまう。多くの死体を埋めた日本兵の出身地、氏名は分からない。

ロシアが日本兵の死体の行方を公表することはないと思う。ゴルバチョフ大統領が訪日の時日本人墓地を参拝するのがテレビで放映された。テレビを見る世界の人々は日本兵は墓地に眠っていると信じるだろう。私は日本人墓地は世論の都合によつて作られた墓地と思う。その墓地に誰が幾人埋められているのか、自由に訪ねることもできない墓地。ソ連末期の頃の指導者が言つた「汚いところは時が過ぎれば世間から忘れ去られてしまう」、無責任この上ない発言であるが、事実世間から忘れ去られようとしている。

私達が作業に通う道端に四十歳くらいの男性が凍死していた。顔は道行く人々に向けられていた。帰るときも顔は道行く人々に向けられていた。次の日も放置されていた。肉親も知人もいないのだろうか。でも私には死者の顔が過酷な苦しみから逃れ、安らかに眠っているように思われる。彼もまた死体置き場に運ば

れ、闇から闇に始末されるのだから。この町には数十万の流刑者が寒さと食糧不足に耐え強制労働に服している。この人達はロシア民族以外の人々である。ロシア人によって罪なき人々が流刑者として送り込まれている。二度と町を離れることはできない。そんな話を聞いたとき、私はロシア民族以外の子孫を断つための投獄であったのではと思う。それはこの町に子供がいないことだ。多くのソ連人は新居を持っているが、一人の子供も見つたことはなかった。

役人達は遺骨、遺品、筆記したメモ等を所持することを禁じていた。もちろん筆記用具、用紙も求めることのできない社会でした。三本木を運んだ死体置き場を見てそうとしか思えなかった。KGBを恐れ、言論の自由を失い強制労働、そして死体置き場に行く時を待つ。活気のない無表情な姿に見える。私達の前に姿を現さぬ別の世界に住む役人達は、地位を利用して不自由なく生活している。シベリアでは日本兵捕虜の死亡者は六万人といわれている。幾人の遺骨が確認されたのか、骨はあっても氏名の分かる者はいない。ロシ

アでは何も不思議ではない。人間の死は人間の終わりで土と化す、何も残らない。私の知る友の眠る場所は一人も確認できない。これはロシアに住む一般市民も私達と同じ運命を歩いたのだと思う。

日本人の流刑者

二十三年八月、私達が作業より帰ると、収容所の入り口で二人の日本人、四十歳ぐらいだろうか、日本の消防の法被はびを着て私達の帰りを待っていた。ソ連兵は彼らを収容所に入れることを許さないので門の内と外で会話する。数日間何も食べていないとのこと、粥を運ぶと喜んで食べていた。彼ら二人は樺太の出身で、空腹のために大豆を盗み食べた理由で二年の強制労働をさせられ、タシケントで刑を終わり解放された。所持品も金もない二人はシベリアの大地を放浪しているのだ。日暮れ前に行くあてもなく去って行く。数日後、今度は一人の若い女性が私達の帰りを待っていた。彼女も門の内と外での会話、お粥を運び食べさせる。彼女は結婚式のために三日作業を休んだことで二年の強制労働、タシケントで刑が終わった。彼女も金

はもちろん所持品は何一つない。夕暮れに去って行った。

広いシベリアで三人の日本人に出会った。他に大勢の流刑者がいたと思う。空腹のため大豆を盗んで食べた、結婚式のため三日作業を休んだ、その罪で列車で一カ月もかけてそんなところに送り込む必要があるのだろうか。ソ連の刑法を知らない日本人に対して温かい情がないのが残念に思う。結婚のため三日仕事を休んだ、そのために流刑。人生で一番楽しいときであるはずなのに、二年間の刑を終わり出所。ソ連はなぜ樺太に送り返さないのか。一人、二人とシベリアに放り出してしまふ。防寒具も持たずに行動している彼ら、あの寒い冬が近づいているというのに。この町を離れて次の駅まで列車で二日は必要だろう、部落も人家もない雪原を歩くことはできない。暖をとることも食糧を得ることもできない。彼らには何か一日一日と死の近づく音がするようである。

密告

密告者は国家に利益をなす勇氣ある市民として称賛

される。自分の身を守るために他人を密告する、そのために無実の罪で投獄される。生活に不平不満を言っても思想犯として問われる社会だ。肉親、友人といえども安心して話すことはできない。また、いつ現れるか知れないKGBとその手先、言論の自由は完全に失われ、話し合う姿は見られない。

人と人の和

この町は、幾千里も離れた所より流刑された者、刑を終わった者、強制移住してきた者、彼らを銃でもって監視する者、そして監視する者を監視する役人達の町である。労働者は役人達の指示によって作業し、ノルマを強要される。ノルマ達成のために働く。ノルマ遂行のためのみに働くので互いに助け合うことをしない。言論の自由を失った彼らはKGBを恐れて口を閉ざしてしまっている。人と人との会話はなく、人間関係は完全に失われていた。文化行事は何もなく、人の集まる場所がない。筆記用具も用紙も求めることができないためにメモすることも至難であった。不毛の地での寒さ、食糧不足、重労働、人間の生きる限界での

生活ではあるが、一つ屋根の下に住む兵士二百人のうち氏名を知る者は寝床を共にする左右の友ぐらいだ。生きるために、食うために働く、それ以外に何もすることはない。ソ連の人が数人集まり話し合う場を見たことはないが、五人ほどの婦人が昼休みに合唱しているのを見たことがある。カチューシャと労働歌。歌は楽しいはずであるが、彼女達の歌声は寂しく悲しく聞こえてくる。この合唱も一度だけで、二度と聞くことはなかった。密告者を恐れ一日じゅう話さない。当然人と人の交流はなく、また役人達は都合勝手に作業現場を移動転職する。いかなる場合であっても了解はなく、いつ誰が去って行くか分からぬ仕組みであるため人間関係は断たれてしまう。

婦人のアパートを訪ねて

役人達のために働いていた頃、半月ほどであるが、小柄のよい婦人が事務員として現場に来たことがあった。彼女の主人はドイツとの戦いで、そして一人息子もドイツで戦死した未亡人だった。私が息子に似ていると何かと親切にしてくれた。昼休みに彼女のアパー

トに案内された。四畳半ほどの一室が住居だ。室内には何も無い。家具も食器類も着替えもない。水を飲むためか空きかんが一個あった。捕虜である私達と同じである。違うのは住居だ。雑居する我々と個室に住む人との違い。所持品はない。主人と息子を戦争で失ったというが、その遺品は何も残っていない。

ソ連は私達の友の遺骨、遺品の所持を禁じていた。ソ連の人も肉親の遺品を所持できない。これは流刑地のことであるためなのかも知れないが、他の地区のことは分からない。帰国乗船前に死亡者と住所を記入したメモを発見され、十年の刑を受けた日本軍人がいる。罪名はスパイである。一枚のメモ、友の死を家族に知らせる、日本人であれば帰国できなかった友に唯一のできることである。婦人は法を忠実に守っているのか、部屋には一冊の書物もメモらしきものも筆記用具も見られない。主人と息子の死も、婦人の死も、また私達を教育した人間の死も、後には何も残らない、土になってしまう。その教育を現実に行うことができた。ある日突然その婦人の姿が見られなくなった。

「さようなら」と別れの言葉を交わすこともできない社会でもあるようだ。

食事も平等に分配されるのか

働かざる者は食うべからず。食うべからず、これは死を意味するのではないだろうか。働かぬ者は死ねということだ。夕食はノルマ、作業成績によって支給される。支給される窓口は四つ。甲・乙・丙・丁と、ノルマ一〇〇以上・八〇・六〇・四〇以下と区分される。毎日、作業により支給される窓口が異なってくる。甲食であっても腹を満たす粥の量ではない。丁食ともなれば水の多い粥である。食事をノルマにより区分する役人達は、労働と食事を平等に分配する目的で実施しているのであるが、別の目的があるように私には感じた。人間関係をなくし、悪くして、この食事で命を左右するのだ。甲食を受け取る窓口に列をなす者、丁食に列をなす者、甲食を受け取る者も丁食を受け取る者も人間の生きる道を迷って歩いているようだ。それも零下四〇度に近い毎日、室外において生きるために受け取る粥、その粥が区分される。区分され

るノルマに大きな間違いがあるのだ。十一中隊での土木作業は夏でも冬でも四〇パーセント以下の成績である。ノルマの達成はできないほどのノルマ設定だ。重労働と寒さに耐えての作業、それで丁食だ。私は、役人達のためにノルマもなく作業も強要されない、それでも毎日が一五〇パーセントの作業成績である。ソ連では役人に利する者は無条件で甲食だ。土木作業に送り込まれる囚人達には死が待っているのでは、私にはそう思えて仕方がない。人間が食事を区分する、これほど人間不信になる原因はないと思う。平等に分配するために盗みの罪は重い。前に空腹のために大豆を盗み二年の刑を受けた者がいる。食糧の監視は厳重である。一度の食事にジャガイモ三個のことがあった。それも良質のものでない。固くて食べられない芋もある。

休日の日、収容所所長ミカゼ大佐の自宅に使役で大袋に詰めた良質の芋三袋をソリに乗せて運んだことがある。所長はミカゼ大佐と聞いているが、収容所内では見たことはなかった。その日も姿を見せなかった。

役人達、高官は不思議と顔を見せない。女中が出てきて芋を受け取った。ソ連では人が人を使用できないと教育された。女中を使用しているのを不思議に思い尋ねてみると、人を使用する場合には主人と同等の生活を保証すればよいとのことである。役人達は都合よく勝手に世渡りしている、そうとしか思えない。三個の芋を盗んで投獄される者もいれば、大袋三個の芋を公然と運び込ませる人達もいる。

あるとき貨車でキャベツが入荷してきた。夜中に使役で荷物を下ろしに行く。丸いキャベツは一個も無い。回りの葉だけが大量に入荷してきた。数日間、葉のみが支給されたのは困った。食べて一週間もすると気分が悪くなるほど空腹感を味わう。またあるとき肉が入荷、夜中に使役に出る。豚の耳と足の先である。肉をそぎ出すのに大変な労力が必要だった。キャベツの丸い玉、良質な肉の行方は、そんなことを思わずにはいられない。労働者達も我々と同じ生活をしているようである。この町には寒さのために果物は見られない。入荷もないのか、三年間一個の林檎も果物

は一切見られなかった。役人達は別のルートで入手していたのではないだろうか。

一食一食の食事は分配されるので、一般労働者も余分な食糧を保つことができないうのである。あるとき良質な粥が一週間ほど支給された。食事がよくなったと喜んだが後が悪い。役人達の計算間違いだっただ。食べたものは返さなくてはと、水ばかりの粥が続いたのには参った。二年ほど過ぎた休日に、一個の握り飯が支給された。握り飯、兵達はじっと見つめてなかなか食べようとしない。祖国日本を思い出しているのであろうか。老兵の中には見つめて涙する者もいた。私はこの小さな握り飯が毎日一個支給されていたら多くの兵が死ぬことはなかっただろうと思う。この握り飯を見ないで死亡した人々のことを思い出す。握り飯は帰るまで二度と支給されなかった。

私達の食生活を話しても、それで生きることができると信ずることができないほど悪かった。その中でも、食糧を区分して分配する、これほど人間の心を傷つけるものはなかった。朝食は一個の黒パンを十五

切れにして十五人の兵が頂いた。食パン一切れの半分ほどの大きさである。手の上にある小さなパンが生死を左右する。毎朝、公平に分配するためにくじ引きで小さなパンを分けていた。あるとき婦人が一個の黒パンを持って歩いているのを見た。それは一度だけであるが、この町では不思議なことだった。ソ連労働者達も昼食にパンを食する者はいなかったが、食糧には困っていても不満を表現する者は誰もいない。衣服も別ルートで分配された。婦人は別ルートで黒パンを手に入れているのだろう。

医師

収容所には医務室はあれど医師、看護婦、薬はない。多くの兵が死亡したが、医師の手当てを受けた者、一粒の薬を飲んだ者も一切いかなかった。この収容所に軍医が一度だけ身体検査に来た。小柄な愛想のよい軍医大尉の女性医官である。十一棟の兵舎全員が裸になって医官の来るのを待つ。検査目的は、他人に見せない品物、その周りの毛である。毛じらみ予防のための毛の有無である。毛のないところにぶら下がって

いる、見られた代物ではない。一列になって並んでいる。女性医官一人が腰の周りを見て歩く。異物の前に止まり「オーチンハラショー」大きな物に感動したのか喜んでいいる。肉が落ち細くなった体、体調のことなど眼中にない。腰の周りだけ見て歩く医者である。これがソ連の医師である。一般市民も医師の診断を受けることができないのだろうか。

町を見て

内外の情報は完全に閉ざされ、教育の場も文化交流の場もない。言論の自由は完全に閉ざされ、作業労働も役人達が指示し、自由に働くことのできない社会である。話し合って、助け合って働くことができない。また他人の作業を助ける必要はなく、自分のノルマのみを果たせばよい。

私達が作業に出発するとき、毎朝人員を調べる。ソ連軍少尉か曹長か、五列になった兵を前から数えて最後に手帳を出して計算する。二度、三度と繰り返し、なかなか計算できない。零下数十度の寒さの中で計算の終わるまで待っている我々は、寒さのために体力を

消耗してしまふ。そんな毎日の中で四中隊では兵がノルマを強要され、重労働に耐えられず多くの兵が死亡した。

生産される鑄物部分品は、数量のみ、ノルマのみで作業が進められ、私達が一〇〇パーセントの数を作っても不良品が多い。製品の良否は別で、とにかく数が上がれば甲食が食べられる。人の命を失ってまでして作られた製品が野積みされ、赤く錆び、時にはスクラップに回される。モスクワで計画され指示する役人達、現場で労働を指示する役人達、彼らは都合勝手に無責任な作業行程を組んでいると思われる。市民が使用する靴を見れば満足な靴はない。左右の靴が長短で、色も違っている。一足として使用できれば、一般の人達も分配された靴を別に気にもせずに使用している。計画生産では数をのみ要求するために粗悪品が多い。役人達は、別の生産ルートで作られるのか労働者よりも上等な靴を使用している。国で計画された品物であり、個人で作ることはできない。計画生産された品物が分配される。国から分配された品物以外のもの

は求めることができない。町には物を売っている店は一軒もない。ソ連では個人で品物を売ることはできない。分配される品物を持つ以外、物を手に入れることはできない。一般市民が生活するために必要な日用品、書物等何一つ求めることはできない。ソ連人はトイレに紙を使用しないようだ。日本人は紙が必要である。ちり紙なんか見たこともない。新聞紙を手に入れることも至難である。新聞紙を小さく切って使う。小さくてもたくさんあれば安心して生活できる。日本では多くの菓子類や果物も作られているが、私達の住む町にはない、ない、何も無い。計画生産されていないのだろう。分配されるのは僅かな食糧だけである。

ソ連では暴力は罪が重い。一発でも手を出すと二年以上の刑務所行きだ。日本人捕虜が暴力を受けるようなことはなかった。暴力の罪が重いのは、役人達の身を守るためにあるように私には思えてならない。

終わりに、私達がロシアを知るために度々モスクワが放映される。モスクワはソ連で一番美しい場所である。見せないところ、クラスノヤルスクも自由に訪ね

ることのできる社会になって欲しい。そして文化の交流を初め、互いに幸せな人生を求め合っていると思う。

〔編注〕

片山衛真氏の手記（その一）は、第XI巻に掲載されております。

【執筆者の紹介】

住 所 岡山県北方

生年月日 大正十四年一月十四日

学 歴 三野小学校卒業

軍 歴 第二三八部隊ハタイ隊 軍属

関東軍第三六二部隊第九中隊 昭和二十年

三月九日入隊

入 ソ 昭和二十年九月十六日 クラスノヤルスク

帰 国 昭和二十三年十月七日

現 在 土木会社に勤める

（岡山県 妹尾 正一郎）

追 想

静岡県 藤 田 悦 郎

はじめに

この追想記は、当時の記録が一字一句もないので、四十年ほど経っての「記憶」を頼りに書き上げたものであるから、日時、人名、人数等誤りが多少あるかも知れないが、うそのつもりはない。軍隊生活は十カ月で、しかも大事な時期に三カ月ほど練兵休をやり、兵隊生活・訓練を休んだので、軍隊特有の言葉・習慣が身に付かず、中途半端な言語、表現が記述中数々あるがやむを得ない。また、軍隊生活は日本人幾百万の人が経験しているので殊更書く必要もないと思ったので、ただ自分に関した事のみ書いた。

なお、また、ダモイの港、ナホトカの様子も幾十万の人が同じ経験をしているので省いた。

文中、人名は、佐藤大隊長に読んでいただく意図を